

煙管

芥川龍之介

青空文庫

加州石川郡金沢城の城主、前田齊広は、参観中、江戸城の本丸へ登城する毎に、必ず愛用の煙管を持つて行つた。当時有名な煙管商、住吉屋七兵衛の手に成つた、金無垢地に、劍梅鉢の紋ぢらしと云う、数寄を凝らした煙管である。

前田家は、幕府の制度によると、五世、加賀守綱紀以来、大廊下詰で、席次は、世々尾紀水三家の次を占めている。勿論、裕福な事も、当時の大小名の中で、肩を比べる者は、ほとんど、一人もない。だから、その当主たる齊広が、金無垢の煙管を持つと云う事は、寧ろ身分相当の裝飾品を持つのに過ぎないのである。

しかし齊広は、その煙管を持つている事を甚だ、得意に感じていた。もつとも断つて置くが、彼の得意は決して、煙管そのものを、どんな意味でも、愛翫したからではない。彼はそう云う煙管を日常口にし得る彼自身の勢力が、他の諸侯に比して、優越な所以で悦んだのである。つまり、彼は、加州百万石が金無垢の煙管になって、どこへでも、持つて行けるのが、得意だつた——と云つても差支えない。

そう云う次第だから、齊広は、登城している間中、殆どその煙管を離した事がない。人と話しをしている時は勿論、独りでいる時でも、彼はそれを懐中から出して、鷹揚おうように口に啣くわえながら、長崎煙草ながさきたばこか何かの匂いの高い煙りを、必ず悠々とくゆらせている。

勿論この得意な心もちは、煙管なり、それによつて代表される百万石なりを、人に見せびらかすほど、増長ぞうちようまん慢まんな性質のものではなかつたかも知れない。が、彼自身が見せびらかさないまでも、殿中でんちゆうの注意は、明かに、その煙管に集注されている観があつた。そうして、その集注されていると云う事を意識するのが齊広にとつては、かなり愉快な感じを与えた。——現に彼には、同席の大名に、あまりお煙管が見事だからちよいと拝見させて頂きたいと、云われた後あとでは、のみなれた煙草の煙までがいつもより、一層快く、舌を刺戟しげきするような気さえ、したのである。

二

齊広なりひろの持っている、金無垢きんむくの煙管きせるに、眼を駭おどろかした連中の中で、最もそれを話題にする事を好んだのは所謂いわゆる、お坊主ぼうずの階級である。彼等はよるとさわると、鼻をつき合せて、

この「加賀の煙管」を材料に得意の饒舌を闘わせた。

「さすがは、大名道具だて。」

「同じ道具でも、ああ云う物は、つぶしが利きやす。」

「質に置いたら、何両貸す事かの。」

「貴公じゃあるまいし、誰が質になんぞ、置くものか。」

ざつと、こんな調子である。

するとある日、彼等の五六人が、円い頭をならべて、一服やりながら、例の如く煙管の樽をしていると、そこへ、偶然、御数寄屋坊主の河内山宗俊が、やって来た。——後年「天保六歌仙」の中の、主な〔role〕をつとめる事になった男である。

「ふんまた煙管か。」

河内山は、一座の坊主を、尻眼にかけて、空嘯いた。

「彫と云い、地金と云い、見事な物さ。銀の煙管さえ持たぬこちとらには見るも眼の毒……」

調子にのつて弁じていた了。哲と云う坊主が、ふと気がついて見ると、宗俊は、いつの間にか彼の煙管入れをひきよせて、その中から煙草をつめては、悠然と煙を輪にふいて

いる。

「おい、おい、それは貴公の煙草入れじゃないぜ。」

「いいって事よ。」

宗俊は、了哲の方を見むきもせず、また煙草をつめた。そうして、それを吸ってしま
うと、生なまあくびを一つしながら、煙草入れをそこへ抛ほうり出して、

「ええ、悪い煙草だ。煙管ごのみが、聞いてあきれるぜ。」

了哲は慌てて、煙草入れをしまった。

「なに、金無垢きんむくの煙管なら、それでも、ちよいとめようと云うものさ。」

「ふんまた煙管か。」と繰返して、「そんなに金無垢が有難けりや何故お煙管拝領と出か
けねえんだ。」

「お煙管拝領?」

「そうよ。」

さすがに、了哲も相手の傍ぼう若無じやくぶじん人にんなのにあきれたらしい。

「いくらお前、わしが欲ばりでも、……せめて、銀でもあれば、格別さ。……とにかく、
金無垢だぜ。あの煙管は。」

「知れた事よ。金無垢ならばこそ、貰うんだ。真しんちゆう 鑰だらくの駄六だろくを拝領に出る奴がどこにある。」

「だが、そいつは少し恐れだて。」

了哲はきれいに剃そった頭を一つたいて恐縮したような身ぶりをした。

「手前が貰おれわざ、己おれが貰う。いいか、あとで羨うらやましがなるなよ。」

河内山はこう云つて、煙管をはたきながら肩をゆすつて、せせら笑つた。

三

それから間もなくの事である。

斉なりひろ 広ひろがいつものように、殿でんちゆう 中ちゆうの一間で煙草をくゆらせていると、西せい 王おう 母ぼを描えいた金きん 襖ぶすまが、静あに開あいて、黒くろ 手ての黄きはちじよう 八はち 丈じように、黒くろの紋もん 附つきの羽織うやうやを着た坊主うやうやが一人、恭うやうやしく、彼の前へ這つて出た。顔を上げずにいるので、誰だかまだわからない。—— 斉なりひろ 広ひろは、何か用が出来たのかと思つたので、煙管きせるをはたきながら、寛かん 潤かつに声をかけた。

「何用じゃ。」

「ええ、宗俊御願がございます。」

河内山はこう云つて、ちよいと言葉を切つた。それから、次の語を云つている中に、だんだん頭を上げて、しまいには、じつと齊広の顔を見つめ出した。こう云う種類の人間のみが持つて居る、一種の愛嬌をたたえながら、蛇が物を狙うような眼で見つめたのである。

「別儀でもございませませんが、その御手許にございまする御煙管を、手前、拝領致しとうございまする。」

齊広は思わず手にしていた煙管を見た。その視線が、煙管へ落ちたのと、河内山が追いかけるように、語を次いだのが、ほとんど同時である。

「如何でございましょう。拝領仰せつけられましょうか。」

宗俊の語の中にあるものは懇請の情ばかりではない、お坊主と云う階級があらゆる大名に対して持つている、威嚇の意も籠っている。煩雑な典故を尚んだ、殿中では、天下の侯伯も、お坊主の指導に従わなければならぬ。齊広には一方にそう云う弱みがあった。それからまた一方には体面上卑吝の名を取りたくないと云う心もちがある。しかも、彼にとって金無垢の煙管そのものは、決して得難い品ではない。——この二つの動機が一つにな

つた時、彼の手は自ら、その煙管を、河内山の前へさし出した。

「おお、とらす。持つてまいれ。」

「有難うございまする。」

宗俊は、金無垢の煙管をうけとると、恭しく押頂おしいただいて、そこそこ、また西王母の襖ふすまの向うへ、ひき下つた。すると、ひき下る拍子に、後から袖を引いたものがある。ふりかえると、そこには、了哲りょうてつが、うすいものある顔をにやつかせながら、彼の掌てのひらの上にある金無垢の煙管をももの欲しそうに、指さしていた。

「こう、見や。」

河内山は、小声でこう云つて、煙管の雁首がんくびを、了哲の鼻の先へ、持つて行つた。

「とうとう、せしめたな。」

「だから、云わねえ事じゃねえ。今になつて、羨ましうらやがたつて、後の祭だ。」

「今度は、私も拝領わしと出かけよう。」

「へん、御勝手ごかってになせえました。」

河内山は、ちよいと煙管の目をひいて見て、それから、襖ぶごしに齊広の方をいちべつ一瞥し
ながら、また、肩をゆすつてせせら笑つた。

四

では、煙管をまき上げられた斉広なりひろの方は、不快に感じたかと云うと、必しもそうではない。それは、彼が、下城げじょうをする際に、いつになく機嫌きげんのよさそうな顔をしているので、供ともの侍たちが、不思議に思ったと云うのでも、知れるのである。

彼は、むしろ、宗俊に煙管をやった事に、一種の満足を感じていた。あるいは、煙管を持つている時よりも、その満足の度は、大きかったかも知れない。しかしこれは至極当然な話である。何故と云えば、彼が煙管を得意にするのは、前にも断ことわつたように、煙管そのものを、愛あいがん翫くわんするからではない。実は、煙管の形をしている、百万石が自慢なのである。だから、彼のこの虚栄心は、金無垢の煙管を愛用する事によって、満足させられると同じように、その煙管を惜しげもなく、他人にくれてやる事によって、更によく満足させられる訳ではあるまいか。たまたまそれを河内山にやる際に、幾分外部の事情に、強しいられたような所があつたにしても、彼の満足が、そのために、少しでも損ぜられる事などはないのである。

そこで、齊広は、本郷ほんごうの屋敷へ帰ると、近習きんじゆの侍に向つて、愉快そうにこう云つた。「煙管は宗俊の坊主にとらせたぞよ。」

五

これを聞いた家かちゆう中の者は、齊広なりひろの宏こうりよう量りやうなのに驚いた。しかし御用部屋ごようべやの山崎勘左衛門んざえもん、御納戸掛おなんどがかりの岩田内蔵之助くらのすけ、御勝手方おかつてがたの上木九郎右衛門かみき——この三人の役人だけは思わず、眉まゆをひそめたのである。

加州一藩の経済にとつては、勿論、金無垢きんせの煙管きせる一本の費用くらいは、何でもない。が、賀節朔望がせつさくぼう二十八日の登城とじようの度に、必ず、それを一本ずつ、坊主たちにとられるとなると、容易ならぬ支出である。あるいは、そのために運上うんじようを増して煙管いりめの入口つぐなを償つぐなうような事が、起らないとも限らない。そうなつては、大変である——三人の忠義の侍は、皆云い合せたように、それを未然わそに惧おそれた。

そこで、彼等は、早速評議を開いて、善後策を講じる事になった。善後策と云つても、勿論一つしかない。——それは、煙管じがねの地金じがねを全然変更して、坊主共の欲しがらないよう

なものにする事である。が、その地金を何にするかと云う問題になると、岩田と上木とで、互に意見を異にした。

岩田は君公の体面上銀より卑しい金属を用いるのは、異なものであると云う。上木はまた、すでに坊主共の欲心を防ごうと云うのなら、真鍮を用いるのに越した事はない。今更体面を、顧慮する如きは、姑息の見であると云う。——二人は、各々、自説を固守して、極力論駁を試みた。

すると、老功な山崎が、両説とも、至極道理がある。が、まず、一応、銀を用いて見て、それでも坊主共が欲しがるようだったら、その後、真鍮を用いても、遅くはあるまい。と云う折衷説を提出した。これには二人とも、勿論、異議のあるべき筈がない。そこで評議は、とうとう、また、住吉屋七兵衛に命じて銀の煙管を造らせる事に、一決した。

六

齊広は、爾来登城する毎に、銀の煙管を持って行った。やはり、劍梅鉢の紋ぢらしの、精巧を極めた煙管である。

彼が新調の煙管を、以前ほど、得意にしていけない事は勿論である。第一人と話しをして
 いる時でさえ滅多に手にとらない。手にとつても直すぐにまたしまつてしまふ。同じ長崎煙草
 が、金無垢の煙管でのだ時ほど、うまくないからである。が、煙管の地金じがねの変つた事は
 独り齊広の上に影響したばかりではない。三人の忠臣が予想した通り、坊主共ぼうずどもの上にも、
 影響した。しかし、この影響は結果において彼等の予想を、全然裏切つてしまふ事に、な
 つたのである。何故と云えば坊主共は、金が銀に變つたのを見ると、今まで金無垢なるが
 故に、遠慮をしていた連中さえ、先を争つて御煙管拝領に出かけて来た。しかも、金無垢
 の煙管にさえ、愛あい着じやくのなかつた齊広が、銀の煙管をくれてやるのに、未練みれんのあるべき
 筈はない。彼は、請われるままに、惜し気もなく煙管を投げてやった。しまいには、登城
 した時に、煙管をやるのか、煙管をやるために登城するのか、彼自身にも判別が出来なく
 なつた——少くともなつたくらいである。

これを聞いた、山崎、岩田、上木の三人は、また、愁しゆう眉びをあつめて評議した。こうな
 つては、いよいよ上木の献策通り、真鍮の煙管を造らせるよりほかに、仕方がない。そこ
 で、また、例の如く、命が住吉屋七兵衛へ下くだろうとした——丁度、その時である。一人の
 近習きんじゆが齊広の旨を伝えに、彼等の所へやつて来た。

「御前は銀の煙管を持つと坊主共の所望がうるさい。以来従前通り、金の煙管に致せと仰せられます。」

三人は、啞然として、為す所を知らなかった。

七

河内山宗俊は、ほかの坊主共が先を争って、齊広の銀の煙管を貰いにゆくのを、傍痛く眺めていた。ことに、了哲が、八朔の登城の節か何かに、一本貰って、嬉しがっていた時などは、持前の癩高い声で、頭から「莫迦め」をあげせかけたほどである。彼は決して銀の煙管が欲しくない訳ではない。が、ほかの坊主共と一しよになつて、同じ煙管の跡を、追いかけて歩くには、余りに、「金箔」がつきすぎている。その高慢と欲との闘ぎあうのに苦しめられた彼は、今に見ろ、己が鼻を明かしてやるから——と云う気で、何気ない体を装いながら、油断なく、齊広の煙管へ眼をつけていた。

すると、ある日、彼は、齊広が、以前のような金無垢の煙管で悠々と煙草をくゆらしているのに、気がついた。が、坊主仲間では誰も貰いに行くものがないらしい。そこで彼は

折から通りかかった了哲をよびとめて、そつと顛あじで齊広の方を教えながら囁ささやいた。

「また金無垢になったじゃねえか。」

了哲はそれを聞くと、呆あきれたような顔をして、宗俊を見た。

「いい加減に欲ばるがいい。銀の煙管でさえ、あの通りねだられるのに、何で金無垢の煙管なんぞ持って来るものか。」

「じゃあれは何だ。」

「真鍮だろうさ。」

宗俊は肩をゆすつた。四方あたりを憚はばつて笑い声を立てなかつたのである。

「よし、真鍮なら、真鍮にして置け。己おれが拝領と出てやるから。」

「どうして、また、金だと云うのだい。」了哲の自信は、怪しくなつたらしい。

「手前たちの思惑おもわくは先様さきさま御承知だよ。真鍮と見せて、実は金無垢を持って来たんだ。

第一、百万石の殿様が、真鍮の煙管を黙って持っている筈がねえ。」

宗俊は、口早にこう云つて、独り、齊広の方へやつて行つた。あつけにとられた了哲を、例の西王母せいおうぼの金襖せいのうぼの前に残しながら。

それから、半時はんときばかり後のちである。了哲は、また畳廊下たたみろうかで、河内山に出つくわした。

「どうしたい、宗俊、一件は。」

「一件は何だ。」

了哲は、下唇をつき出しながら、じろじろ宗俊の顔を見て、

「とぼけなさんな。煙管の事さ。」

「うん、煙管か。煙管なら、手前にくれてやらあ。」

河内山は懐から、黄いろく光る煙管を出したかと思うと、了哲の顔へ抛りつけて、足早に行つてしまつた。

了哲は、ぶつけられた所をさすりながら、こぼしこぼし、下に落ちた煙管を手にとつた。見ると劍梅鉢けんうめばちの紋ぢらしの数寄すきを凝こらした、——真鍮しんすうの煙管である。彼は忌々いまいましそうに、それを、また、畳の上へ抛り出すと、白足袋しろたびの足を上げて、この上を大おおき仰ように踏みつける真似をした。……

八

それ以来、坊主が斉なりひろ広ひろの煙管きせるをねだる事は、ぱったり跡を絶つてしまつた。何故と云

えば、齊広の持つている煙管は真鍮だと云う事が、宗俊と了哲とによって、一同に証明されたからである。

そこで、一時、真鍮の煙管を金と偽いつわつて、齊広を欺あざむいた三人の忠臣は、評議の末再び、住吉屋七兵衛に命じて、金無垢の煙管を調製させた。前に河内山にとられたのと寸分もちがわない、劍梅鉢の紋ぢらしの煙管である。——齊広はこの煙管を持って内心、坊主共にねだられる事を予期しながら、揚々として登城した。

すると、誰一人、拝領を願ひに出るものがない。前に同じ金無垢の煙管を二本までねだつた河内山さえ、じろりと一瞥を与えたなり、小腰をかがめて行ってしまった。同席の大名は、勿論拝見したいとも何とも云わずに、黙っている。齊広には、それが不思議であつた。

いや、不思議だつたばかりではない。しまいには、それが何となく不安になつた。そこで彼はまた河内山の来かかつたのを見た時に、今度はこつちから声をかけた。

「宗俊、煙管をとらそうか。」

「いえ、難ありがと有うございしますが、手前はもう、以前に頂いて居ります。」

宗俊は、齊広がほんろう弄弄するとも思つたのであろう。丁寧な語の中に、鋭い口こうき氣を籠め

てこう云つた。

齊広はこれを聞くと、不快そうに、顔をくもらせた。長崎煙草の味も今では、口に合わない。急に今まで感じていた、百万石の勢力が、この金無垢の煙管の先から出る煙の如く、多愛なく消えてゆくような気がしたからである。……

古老の伝える所によると、前田家では齊広以後、齊泰も、慶寧も、煙管は皆真鍮のものを用いたそうである、事によると、これは、金無垢の煙管に懲りた齊広が、子孫に遺い誠でも垂れた結果かも知れない。

(大正五年十月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集¹」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

煙管

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>